

## 研究ノート

## 伝統技法「龍巻」を現代的にアレンジした陶磁器製品のデザイン開発

山田 圭\*1、長田貢一\*2

Development of Pottery Products Using a Traditional Technique  
“RYUUMAKI” Arranged Modernly

Kei YAMADA\*1 and Koichi OSADA\*2

Tokoname Ceramic Research Center\*1 Weights and Measures Center\*2

常滑焼伝統技法「龍巻」を現代的にアレンジし、それをを用いた新規な陶磁器製品のデザイン開発を行った。常滑焼伝統技法「龍巻」は、石膏型等で作製したパーツを器胎に貼り付ける技法であり、パーツの作製に高度な技術を必要とする。このため本研究では、パーツをできるかぎり容易に作製することを念頭に置いた。試作品については、これまでの「龍巻」とは全くイメージの異なる製品を開発することができた。

## 1. はじめに

常滑産地には古くから伝わる伝統技法がいくつもあり、それらを用いた製品は非常に製品価値が高く、高価である。しかし、伝統技法を用いた製品は伝統的な素地・形状・デザインであるため、購入する消費者が限られるなど、なかなか産地の活性化に結びつかない。このため本研究では、伝統的な技法を用いながらも現代的な感覚に合ったアレンジを施すことにより、購買層の拡大を狙うものである。

本年度は伝統技法「龍巻」を採用した。「龍巻」は、器胎に、器胎と同様の土を用いて作製したパーツを貼り付けたもので、「朱泥龍巻」という呼び方もあるように、素地には朱泥が専ら用いられることが多い(図1参照)。明治期に盛んに作られ、盆栽鉢、花瓶、壺、急須等に多く見られ、また、北米にも多く輸出されている。モチーフは専ら龍であり、高級感とともに荘厳な雰囲気を持つ。しかし、パーツの作製には高度な技術を要するため「龍巻」を採用するメーカーは少なく、殆どが職人の手作りによるものである。したがって、高額な製品が多く、購買層は限られるが根強い人気がある。



図1 龍巻花瓶  
(明治時代:龍工組製)

なお、「龍巻」と類似の技法として「貼花文(ちょうかもん)」があるが、「貼花文」は紋章のように簡略化された小さなパーツをワンポイントとして用いる傾向があり、絵柄をパーツにした「龍巻」とは表現方法が明らかに異なるため、本研究では区別した。

## 2. 実験方法

## 2.1 パーツの作成方法

パーツは一般的に石膏型を用いて作製され、本体のみのもものと、貼り代が附属したものがある(図2参照)。貼り代が附属したものは、脱型が容易、器胎から剥がれにくい、器胎とパーツの境界が目立たないよう加工できる等の長所があるが、器胎が重くなる、器胎の形状が損なわれる等の短所もある。

「龍巻」の製品を作る上で最も困難を伴うのがパーツ原型の作製であり、原型の出来が製品の良し悪しを決定すると言える。しかし、原型の作製には陶彫、彫塑等の技術が必要であり、一般的な陶磁器製品の成型技術では



図2 龍巻パーツの石膏型  
(貼り代無し)

\*1 常滑窯業技術センター 材料開発室 \*2 計量センター

作製できないため、「龍巻」採用のネックとなっている。

このため本研究では、できるかぎり容易にパーツを作製するため、以下の方法を検討した。

①パーツを直接作る：量産のためには石膏型が必要であるが、原型、型を作る手間と費用を考えると、型を作らないことも選択肢の一つと考え、極めて単純な形状のパーツに限り、パーツそのものを作製する手法について検討を行った。

②石膏型のみを作る：複雑な形状のパーツを複数作る場合は石膏型が必要である。このため、原型を作らず、石膏板を加工して型を作る手法について検討を行った。

③原型及び型を作る：従来の方法と同様であるが、如何に容易に原型を作るかを念頭に置き、様々な素材を用いて容易に原型を作る方法について検討を行った。

## 2.2 素地の選定

「龍巻」は盆栽鉢、花瓶、壺、急須等常滑産地独特の有色せつ器を用いた製品に施される。このため素地には有色せつ器である鑄込締土、基礎締土によるブレンド土を用い、顔料を添加することにより色彩を調整した。素地色は、鑄込締土は淡茶色、基礎締土はアイボリーである。

## 2.3 デザイン設計

「龍巻」は専ら龍がモチーフとされるが、稀に龍の代わりに般若面が盆栽鉢の足などに用いられることもある。その製品は高級感と荘厳な雰囲気を持つが、絵柄の特性上アイテムや購買層は限られる。本研究では花柄や植物柄を用い、現代的な形状の器胎に施すことにより、広く一般にアピールできるものを目指した。

## 3. 実験結果及び考察

### 3.1 パーツの作成

#### 3.1.1 パーツを直接作る

一般に調理に使われるクリーム絞り出し器を用いて石膏板の上にパーツを作製する手法を試みたが、乾燥が進むと割れる、器胎との接着面（石膏面）から先に乾燥するなどの問題が発生した。

極めて単純なパーツであれば十分に手びねりで作製可能である。

#### 3.1.2 石膏型のみを作る

ルーターを用いて石膏板を彫ることにより、線画の型を作ることができた。しかし、レリーフ状の絵柄を型に彫り込むのは、粘土で原型を作製するのと同様、極めて高度な技術を必要とすることがわかった。

#### 3.1.3 原型及び型を作る

ゴム版画用のゴム板を加工することにより唐草模様 に似た原型を作製した。また、グルーガン、充填用シリコンは線の太さ、描画が安定しないこと、エポキシパテ、油粘土等で原型を作製する手法については、粘土で原型を作製するのと同様極めて高度な造形力を必要とすることがわかった。

## 3.2 試作

3通りの方法で作製したパーツを用い、それぞれ花瓶を試作した。

図3の花瓶Aは手びねりで作ったパーツを貼ったものである。オブジェ的な要素を強くし、花を入れなくてもインテリアとなるようデザインした。図4の花瓶Bは、石膏板をルーターで彫った型で作ったパーツを貼ったものである。中心にあるメインの花を入れる穴を囲んで、サブの花を入れる穴を配置し、容易に生け花のようなレイアウトができるデザインとした。図5の花瓶Cは、版画用ゴム板で作製したパーツを複数組み合わせ、切り貼りして大きな文様にしたものを用いて花瓶全体を覆った。花を入れなくても見ごたえがあるようデザインした。

## 4. まとめ

- (1)伝統技法「龍巻」を現代的な感覚にアレンジすることにより、従来の「龍巻」とは全くイメージの異なる試作品を開発することができた。
- (2)パーツの大きさや厚みを調整することにより、小さな湯呑みから大きな壺まで、様々なアイテムに展開する可能性を見出した。
- (3)本研究では、シンプルなデザインを中心に研究開発を進めたが、精細なパーツの量産にはやはり石膏型が必要であり、今後の課題である。



図3 花瓶A



図4 花瓶B



図5 花瓶C